

Franz Schubert Winterreise Op.89

解説及び歌詞対訳

淡野太郎

はじめに

ヴィルヘルム・ミュラーはこの〈冬の旅〉を創作するにあたって、最初に〈Gute Nacht〉から〈Einsamkeit〉までの12編を発表、続いて第2部の〈Die Post〉と〈Täuschung〉を除く10篇を別の雑誌で発表した。後にそれら22編の詩に前述の2編を加え、さらに詩の順番をいくつか入れ替え、改めて全24編の連作詩として発表している。

シューベルトがこの詩に作曲する時点で、最初に発表された第1部のみを完結した作品として捉えていたであろうことは、自筆譜の第12曲〈Einsamkeit〉の最後に書き込まれたFine（終わり）の言葉、またその最後の曲が第1曲〈Gute Nacht〉と同じ二短調で書かれていることなどから窺える。おそらく完成した第1部をいよいよ出版しようと準備している頃に残りの詩の存在を知り、すぐに後半部分の作曲に取り掛かったようだ。

その時にミュラーの手による改変（詩の順番の並べ替え、部分的な単語あるいは行の訂正）に従った部分とそうでない部分がある。第1部の出版のための校正が進んでいる段階で、再考の時間的余裕がなかったことによる影響も皆無ではないだろうが、第2部の曲順の決め方や、またシューベルトがミュラーの原詩を時には脚韻を崩してまでも改変していること（例えば第20曲の Straße→Wege）などから察しても、自分の考える音楽を構築するため、主人公の心情と遍歴を注意深く設定したシューベルトの意思が感じられる。

演奏にあたって

今回、シューベルトが自分の考えを押し通した部分を重視することをテーマのひとつとした。前述のようにシューベルトが敢えて選んで置き換えた歌詞を尊重し、従来広く行われてきたミュラーの原詩に戻すという方法は採用しなかった。

この考え方は歌詞に留まらず、強弱記号や速度の指定、スラーやアクセントなどアーティキュレーション記号（これらについてシューベルトはかなり細かく書き分けることで知られている）など、定説や先入観に注意しつつ自分の視点で見直した。

調性についても同様に考えた。〈冬の旅〉は原調が高声向けとなっており、中声または低声の歌手が歌うためには移調を余儀なくされる。その需要に応じて、中声用及び低声用の移調譜が出版されているが、その多くが曲によって音の下げ幅がまちまちになっており、例えば最初の2曲が長2度（全音）下げ、第3、4曲が短3度下げ、第5曲は原調のまま、といった具合である。なるほど歌い易さを重視し、歌い手の声を最優先するのならば、実に妥当な調が選ばれている。しかしそのために犠牲になるものも大きい。〈冬の旅〉に納められた24の歌曲は、ひとつひとつが単品として見ても素晴らしい曲ではあるのだが、シューベルトが調の性格付けと曲ごとの関連性を意識して書いていたことは明らかで、自分の声の都合を優先してその関係を崩すことはマイナス面のほうが多いと判断した。

いずれにせよ原調のままでは、ピッチ自体を下げない限り私の声には少々無理があるので、すべての曲を原調から一律、長2度（全音）下げることにした（ここにも若干複雑な問題があり、シューベルトが書いた自筆譜と、最初に出版された所謂初版本には若干の違いがあるのだが、それについては曲目解説の項で触れる）。このようにすると、今度は個人的に低過ぎると感じる曲もいくつか生じるが、きっとテノール歌手が原調で歌う時も同様の問題を感じることだろう。むしろこの「歌いにくさ」が〈冬の旅〉の暗さを際立たせている要素のひとつと捉えることにしたい。

〈冬の旅〉の世界観

〈冬の旅〉の世界は全体が重苦しい暗さに覆われていて、それは救いの見えない暗さである。

私はこの主人公に、満足度が低いと同時に自己評価も低く、さらにその惨めさにどこか酔っていて、斜に構えて世間を醒めた目で見ているといった、屈折した鬱病的性質を見て取った。それはプログラムの序文でも触れたが、鬱病を患って自死を選んだ友人Uの性格とかなり共通する部分があると感じる。心から救いを求めながらそれを信じて待つことが出来ず、ひたすら自分を罰したい、自分さえいなくなれば、という思いに悩み、時には自暴自棄になり、時には空騒ぎし、またある時には出口の見えない空虚な闇に漬かり、それでいてどこか心地良く感じていたり。この人物設定にももちろん異論はあることだろうが、主人公の性格を出来る限り具体的にイメージしたいというのが私の考えなので、どうかご容赦願いたい。

自分から飛び出して放浪の旅に出た割には、この主人公は基本的に積極性に欠ける人物との印象を受ける。それはシューベルトの曲の作り方によるところが大きい。つまり、〈冬の旅〉全24曲はすべてピアノの前奏から始まり、歌が先導して入る曲が皆無なのである。あまりにも単純な特徴のせいか、あまりその事実に触れられることも多くないようだが、これは演奏の上で重要な一貫性と認識している。

この弱々しく拗ね、虚勢を張っている時にも心の陰を隠しきれないような主人公の姿、語弊はあるかもしれないが、周囲の共感や哀れみよりも呆れを招くような青年の姿を表現したいと思っている。

2009年1月23日 淡野 太郎

シューベルト作曲 <冬の旅> 歌詞対訳&楽曲解説

Winterreise Op. 89

冬の旅 作品89

Text von Wilhelm Müller
Musik von Franz Schubert

詞：ヴィルヘルム・ミュラー
曲：フランツ・シューベルト

註：解説中で曲の調性について触れる場合、原調で表記している。本日はすべて長2度(全音)下げた調で演奏する。

ERSTE ABTEILUNG

第一部

1. Gute Nacht

1. さらば

しんと雪の降り積もる様子とも、主人公の重い足取りともとれるピアノの8分音符の刻みから放浪の旅が始まる。歌い出しはそれだけで<冬の旅>のテーマすべてと言っても過言ではない「fremd (余所者)」という言葉から始まり、アフタクトである2拍目の裏、つまり小節の中で一番弱い、疎外感あふれる箇所に配置されている。ピアノの伴奏もことあるごとに2拍目の裏にアクセントが付けられ、それが主人公の置かれた立場とその不平感を後押しする。この一番弱い位置に一番主張の強い言葉が配置されている点が、この<冬の旅>全体に異様な雰囲気をもたらしている。

「gute Nacht」の訳は普通「おやすみ」がよく使われるが(時が夜半または未明と思われるだけになおさらである)、この言葉には昔から別の意味もあり、それは「すべて終わり」「金輪際さようなら」という意味合いであり、宗教的テキストにおいては、二度と会えないであろう辛さ、また強い決別の意を示す時によく使われる。主人公が永遠の別れを決心した思いを伝えるため、拙訳では「さらば」とさせていただいた。

Fremd bin ich eingezogen,
Fremd zieh' ich wieder aus,
Der Mai war mir gewogen
Mit manchem Blumenstrauß.
Das Mädchen sprach von Liebe,
Die Mutter gar von Eh'.
Nun ist die Welt so trübe,
Der Weg gehüllt in Schnee.

^{よそもん}
余所者として俺はやって来て、
余所者として再び出て行く。
五月は俺に好意的だったんだ、
たくさんの花束でもって。
あの娘は愛を語ってたし、
母親なんか結婚話まで持ち出してた。
今やこの世はどんよりして、
道も雪で覆われてしまった。

Ich kann zu meiner Reisen
Nicht wählen mit der Zeit,
Muß selbst den Weg mir weisen
In dieser Dunkelheit.
Es zieht ein Mondenschatten
Als mein Gefährte mit,
Und auf den weißen Matten
Such' ich des Wildes Tritt.

この俺の旅は
時期を選べない。
道も自分で決めなきゃいけない、
この暗がりの中だろうと。
月明かりで出来た影法師
そいつが俺の道連れ、
真っ白な原っぱの上に
けものの足跡を探すんだ。

Was soll ich länger weilen,
Daß man mich trieb' hinaus,
Laß irre Hunde heulen
Vor ihres Herren Haus.
Die Liebe liebt das Wandern,
Gott hat sie so gemacht,
Von Einem zu dem Andern,
Fein Liebchen, gute Nacht.

これ以上長居してどうする、
追ん出されたっていうのに。
いかれた犬どもが吠え立てるのなんか、
主人の家の前で好きにやらせとけ。
愛ってのはさまようのが好きなさ、
神がそういうふうにしたんだから、
誰かから別の奴へとか。
愛しい人よ、さらばだ。

Will dich im Traum nicht stören,
Wär' schad' um deine Ruh',
Sollst meinen Tritt nicht hören,
Sacht, sacht, die Türe zu.
Schreib' im Vorübergehen
Ans Tor dir: gute Nacht,
Damit du mögest sehen,
An dich hab' ich gedacht.

おまえの夢を邪魔する気はない、
おまえの安眠を妨げないように、
俺の足音が聞こえないように、
そっと、そおっと、戸を閉めよう。
去り際にこう書いていこう、
門の脇に「さらば」と。
おまえが見てくれるかもしれないから、
俺がどんなにおまえを想っていたのかを。

2. Die Wetterfahne

激しさと速さを併せ持ったピアノの動きが6/8拍子のリズムで主人公の気持ちを煽る。しかしそれはユニゾンであって、どっしりとした和音の安定感はない。軽佻浮薄なものへの嫌悪をあらわにする主人公だが、自分自身がそうであることにも気付いているようで、そこに自己嫌悪の情をも見い出せるというのは言いすぎであろうか。

Der Wind spielt mit der Wetterfahne
Auf meines schönen Liebchens Haus:
Da dacht' ich schon in meinem Wahne,
Sie pffiff' den armen Flüchtling aus.

風が風見と戯れている、
かわいいあの子の家の上で。
それで俺は妄想したんだ、
あいつら、哀れな逃亡者を口笛で野次ってやがる。

Er hätt' es eher bemerken sollen
Des Hauses aufgestecktes Schild,
So hätt' er nimmer suchen wollen
Im Haus ein treues Frauenbild.

奴はもっと早く気付けばよかったんだ、
家に掛かっているあの看板に。
そうすりゃ決して探そうとなんかしないだろ、
この家に貞淑な女性像なんか。

Der Wind spielt drinnen mit den Herzen,
Wie auf dem Dach, nur nicht so laut.
Was fragen sie nach meinen Schmerzen?
Ihr Kind ist eine reiche Braut.

風は家の中でも心と戯れる、
屋根の上と同様に、ただ騒がしくないだけ。
あいつらが俺の苦しみについて尋ねるってか？
子供が金持ちの花嫁だったのに。

3. Gefrorene Tränen

主人公の足取りは重く、時々立ち止まってしまう様子がピアノの単音（これも強拍を避けた位置にある）で表される。足を引きずりつつ思うことは世の中への不満よりも、自分自身に向けられた疑問。

Gefrorene Tropfen fallen
Von meinen Wangen ab:
Ob es mir denn entgangen,
Daß ich geweinet hab'?

凍ったしずくが
俺の頬から剥がれ落ちる。
いったい俺は気付いてなかったのか、
泣いていたなんて？

Ei Tränen, meine Tränen,
Und seid ihr gar so lau,
Daß ihr erstarrt zu Eise,
Wie kühler Morgentau?

おい涙、俺の涙よ、
おまえらまったく生ぬるいのか、
固まって氷になっちゃうのか、
冷えた朝露のように？

Und dringt doch aus der Quelle
Der Brust so glühend heiß,

胸の泉からほとぼしり出る時は
真っ赤に燃えるような熱さだっただろ、

Als wolltet ihr zerschmelzen
Des ganzen Winters Eis.

おまえらが融かしつくそうとするほどに、
この冬じゅうの水を。

4. Erstarrung

全体に亘ってピアノが3連符の分散和音で主人公の心の中に嵐が吹き荒れる様子を示す。あるいは本当に吹雪の中にいるのかも知れない。焦り、嘆き、憧憬、未練、そして諦めと、全曲に亘って繰り広げられる心情の縮図である。

Ich such' im Schnee vergebens
Nach ihrer Tritte Spur,
Wo sie an meinem Arme
Durchstrich die grüne Flur.

雪の中で俺はむなしく
あの子の足跡を探す。
あの子が俺と腕を組んで
歩き回った緑の野原で。

Ich will den Boden küssen,
Durchdringen Eis und Schnee
Mit meinen heißen Tränen,
Bis ich die Erde seh'.

この地面に口付けしたい、
氷と雪に
俺の涙がしみ込んで行って
大地が見えるようになるまで。

Wo find' ich eine Blüte,
Wo find' ich grünes Gras?
Die Blumen sind erstorben,
Der Rasen sieht so blaß.

どこで花が咲くのを見つけられる？
どこに緑の草を見つけられる？
花々は死に絶え、
芝も色褪せたようだ。

Soll denn kein Angedenken
Ich nehmen mit von hier?
Wenn meine Schmerzen schweigen,
Wer sagt mir dann von ihr?

いったい俺は思い出のひとつも
ここから持って行けないのか？
もし俺の苦しみが押し黙っていたら、
誰が俺にあの子について語ってくれるってんだ？

Mein Herz ist wie erstorben, *
Kalt start ihr Bild darin:
Schmilzt je das Herz mir wieder,
Fließt auch ihr Bild dahin.

俺の心はまるでくたばっちゃまったようだ、
中にはあの子の姿が冷たく凍り付いてる。
いつかこの心がまた融け出したら、
あの子の姿も流れ出してっちゃう。

* ミュラーの詩では erfroren (凍死した)

5. Der Lindenbaum

出だしのピアノの3連符の音型から、前の曲の寒風がまだ少し残っている印象を受ける。大きな1本の菩提樹、その香りは柔らかく、人々の心を穏やかに、朗らかにさせる。愛を語り、誓いの言葉を刻みつけ、その根元で安らかに眠る。古来より菩提樹は愛の象徴とされてきた。しかし時は冬、花は枯れ葉は落ち、風にざわめいた枝々が発する音を主人公は退けるべき誘惑と捉え、見ることも厭う。庇護してくれるものを拒否し、いよいよ彼は孤独に向かっていくが、いつまでも声は聞こえ続け、ますます安らぎは遠いものになっていく。なんという絶望的な歌であろうか。

Am Brunnen vor dem Tore,
Da steht ein Lindenbaum,
Ich träumt' in seinem Schatten
So manchen süßen Traum.

門の前にある泉のほとりに
一本の菩提樹。
その木陰で夢見たもんだ、
ずいぶんたくさんの甘い夢を。

Ich schnitt in seine Rinde
So manches liebe Wort;
Es zog in Freud' und Leide
Zu ihm mich immer fort.

その木の皮に刻んだよな、
そりゃあたくさんの愛の言葉を。
うれしい時も悲しい時も
いつもそいつに引き寄せられてた。

Ich muß' auch heute wandern
Vorbei in tiefer Nacht,
Da hab' ich noch im Dunkeln
Die Augen zugemacht.

彷徨う羽目になった今日、
真夜中にここを通らなきゃいけなかった。
それでまだ真っ暗だったんだが
目をつむっちゃまった。

Und seine Zweige rauschten,
Als riefen sie mir zu:
Komm her zu mir, Geselle,
Hier findest du deine Ruh'.

そしたらその枝がざわめいたんだ、
まるで俺に呼びかけてくるかのように。
「こちらにおいでなさい、仲間よ、
ここで安らぎを見つけれられるよ」

Die kalten Winde bliesen
Mir grad' ins Angesicht,
Der Hut flog mir vom Kopfe,
Ich wendete mich nicht.

冷たい風が吹き付けてきた、
もろに俺の顔に。
帽子が頭から飛んでっちゃまったが、
俺は振り向かなかった。

Nun bin ich manche Stunde
Entfernt von jenem Ort,
Und immer hör' ich's rauschen:
Du fändest Ruhe dort!

今や何時間も
あの場所から遠ざかった。
今なおざわめきが聞こえてきやがる、
「あそこで安らぎを見つけれられるのに！」

6. Wasserflut

6. 洪水

ピアノの音型はまた第5曲の後半部分を踏襲している。この曲では主人公がとめどなく涙を流すが、その涙はおそらく第5曲の後半で既に流れ始めていたのではないだろうか。シューベルトは最初この曲を嬰へ短調で作曲したが、出版する前の編集段階でホ短調に変更している。この移調によって第5曲と同主調となり、曲同士の関係がますます緊密なものとなり、さらに次の第7曲とは全く同じ調となっている。

Manche Trän' aus meinen Augen
Ist gefallen in den Schnee;
Seine kalten Flocken saugen
Durstig ein das heiße Weh!

俺の目から涙がいく筋も
雪に落ちて行った。
冷たい雪のかけらが吸い込んでいく、
渴望したように、熱い悲しみを！

Wenn die Gräser sprossen wollen,
Weht daher ein lauer Wind,
Und das Eis zerspringt in Schollen,
Und der weiche Schnee zerrinnt.

草が芽を出そうとする時は
ぬくい風が吹いて来るもんだ、
そしたら氷はばらばらに砕けて
やわい雪も融けていく。

Schnee, du weißt von meinem Sehnen:
Sag', wohin doch geht dein Lauf?
Folge nach nur meinen Tränen,
Nimmt dich bald das Bächlein auf.

雪よ、俺の憧れをわかってんだろう、
言ってくれよ、いったいどこへ流れて行くんだ？
ただ俺の涙について行けよ、
すぐに小川がおまえを迎えてくれるから。

Wirst mit ihm die Stadt durchziehen,
Muntre Straßen ein und aus—
Fühlst du meine Tränen glühen,
Da ist meiner Liebsten Haus.

その小川と一緒に町を通り抜けて
賑やかな通りに入ったり出たりするだろう、
俺の涙が熱くたぎるのを感じたら、
そこが俺の恋人の家があるとこだ。

7. Auf dem Flusse

7. 川面で

第6曲で主人公の涙を受けた雪は雪解けの時期になれば小川（Bächlein）に合流し、やがてはさらに大きな河（Fluß）に辿り着く。しかし主人公の見た光景はその大きな河でさえも凍結している様子であった。破れた愛の記録を墓標のように川面に刻みつけるが、それはいずれ激しい水流に流される運命。自分の心の激流の中に自分自身を葬り去りたいという願望であろうか。

Der du so lustig rauschtest,
Du heller, wilder Fluß,
Wie still bist du geworden,
Gibst keinen Scheidegruß!

あんなに楽しそうにざわめいていたじゃないか、
明るく奔放な河よ。
なんて静かになっちゃったんだ、
別れの挨拶のひとつもなしに。

Mit harter, starrer Rinde
Hast du dich überdeckt,
Liegst kalt und unbeweglich
Im Sande ausgestreckt.

固まってカチンコチンの皮に
おまえは覆い隠されて、
冷たく横たわって身じろぎもせず、
砂の中にのびちまった。

In deine Decke grab' ich
Mit einen spitzen Stein
Den Namen meiner Liebsten
Und Stund' und Tag hinein:

おまえの覆いに刻み込むよ、
尖った石でもって、
俺の恋人の名前と
時間と日にちを。

Den Tag des ersten Grußes,
Den Tag, an dem ich ging;
Um Nam' und Zahlen windet
Sich ein zerbrochener Ring.

それは最初の挨拶の日と、
俺が出てった日。
名前と数字の周りを囲んで、
切れぎれの輪っかで。

Mein Herz, in diesem Bache
Erkennst du dein Bild?—
Ob's unter seiner Rinde
Wohl auch so reißend schwillt?

俺の心よ、この川に
おのれの姿を見ているのか？
その皮の下でも
きっと猛々しく荒れているんじゃないか？

8. Rückblick

8. 回顧

第7曲で気付いた自分の心の激しい部分に翻弄され、それまで見た光景が次々と脳裏に浮かんで消える様子が、ピアノの曇り掛けるような音型によって鮮やかに繰り広げられる。歌は第1連では「振り向かずに突き進みたい」と歌っているのに音型が一度戻り、第5連では逆に「振り向きたい」と歌っているのに音型は一直線に登っていくなど、主人公が様々な思いに翻弄され、混乱している様子を表している。

Es brennt mir unter beiden Sohlen,
Tret' ich auch schon auf Eis und Schnee,
Ich möcht' nicht wieder Atem holen,
Bis ich nicht mehr die Türme seh',

両足の裏が焼けるように熱い、
確かに氷や雪の上を歩いてるってのに。
俺はひと息もつきたくない、
あの塔がもはや見えなくなるまでは。

Hab' mich an jedem Stein gestoßen,
So eilt' ich zu der Stadt hinaus,
Die Krähen warfen Bäll' und Schloßen
Auf meinen Hut von jedem Haus.

Wie anders hast du mich empfangen,
Du Stadt der Unbeständigkeit,
An deinen blanken Fenstern sangen
Die Lerch' und Nachtigall im Streit.

Die runden Lindenbäume blüten,
Die klaren Rinnen rauschten hell,
Und, ach, zwei Mädchenaugen glühten,
Da war's geschehn um dich, Gesell.

Kömmt mir der Tag in die Gedanken,
Möcht' ich noch einmal rückwärts sehn,
Möcht' ich zurücke wieder wanken,
Vor ihrem Hause stille stehn.

9. Irrlicht

混乱を経て、それまでの未練から少し吹っ切れた様子の主人公。どんな悩みがあっても結局最後は死によって解放される、と思いついたのか、達観した様子すら見せる。ここから先、主人公の「死」を求める方向性が明確になる。

In die tiefsten Felsengründe
Lockte mich ein Irrlicht hin:
Wie ich einen Ausgang finde?
Liegt nicht schwer mir in dem Sinn.

Bin gewohnt das irregehen,
'S führt ja jeder Weg zum Ziel:
Unsre Freuden, unsre Leiden, *₁
Alles eines Irrlichts Spiel.

Durch des Bergstroms trockne Rinnen
Wind' ich ruhig mich hinab—
Jeder Storm wird's Meer gewinnen,
Jedes Leiden auch sein *₂ Grab.

*₁ ミュラーの詩では Wehen (苦痛)

*₂ ミュラーの詩では ein (ひとつの)

10. Rast

第 1 曲と同じく 2/4 拍子で速度指示は Mäßig (節度を持って) となっていて、出版段階でハ短調に変更されたものの、自筆譜の段階ではやはり第 1 曲と同じ二短調で、最初の曲との関連が非常に強い。しかし第 1 曲と比べて、ピアノが示

石ころがあるたびにけつまずいた、
それほど急いで町から出て行ったんだ。
カラスどもが雪玉やあられを投げつけてきた、
どの家からも、俺の帽子めがけて。

えらく違う感じで迎えてくれたじゃないか、
ええ、気まぐれな町よ。
おまえんこのピカピカの窓辺には
ヒバリとかサヨナキドリが鳴き声を競ってた。

丸々とした菩提樹が花を咲かせ、
澄んだ流れはキラキラざわめいていた。
そしてああ、あの娘の両の瞳が輝いていたんだ、
それですっかり参っちゃまったんだな、若造が。

あの日のことが頭に浮かぶと、
もう一度振り向きたくなる。
またフラフラ戻って行って、
あの子の家の前にじっと佇んでいたい。

9. 鬼火

岩壁の谷の底で
鬼火が俺を誘っていた。
どうやって出口を見つけりゃいいんだ？
んなこたあどうでもいいか。

道に迷うのにはもう慣れた、
どんな道だって行き着く先があるってものよ。
我々の喜び、我々の悩み、
すべては鬼火の戯れなんだ。

涸れ川の跡に沿って俺は
縫うようにゆっくりと降りて行く。
どんな流れも海にまで通じてんだから、
どんな悩みもそいつの墓に通じてんだろ。

10. 休息

す主人公の足取りの重さに大きな違いがあり、いかに疲れているのかを訴えかける内容となっている。いざ休む場所を見つけても彼の心は休まらず、むしろ不安が増大しているようだ。

Nun merk' ich erst, wie müd' ich bin,
Da ich zur Ruh' mich lege;
Das Wandern hielt mich munter hin
Auf unwirtbarem Wege.

今やっと、俺はなんて疲れているんだ、と気付く。
休もうと横になった時に。
さすらうことが俺の元気を保っていた、
荒れた道中でも。

Die FüÙe frugen nicht nach Rast,
Es war zu kalt zum Stehen,
Der Rücken fühlte keine Last,
Der Sturm half fort mich wehen.

足は休息を求めてこなかった、
立ち止まるには寒過ぎたのだ。
背中は荷の重さを感じなかったし、
暴風は俺の前進を後押ししてくれた。

In eines Köhlers engem Haus
Hab' Obdach ich gefunden;
Doch meine Glieder ruhn nicht aus:
So brennen ihre Wunden.

狭っこい炭焼き小屋の中に
泊まる場所を見つけた。
ところが俺の手足は休まらない、
なにしろ傷がヒリヒリしやがる。

Auch du; mein Herz, in Kampf und Sturm
So wild und so verwegen,
Fühlst in der Still' erst deinen Wurm
Mit heißem Stich sich regen.

ああ俺の心、戦いや嵐のさなかでは
あんなに激しく、大胆だったじゃないか。
静けさにあって初めて感じているな、おまえの虫が
剣呑な一刺しを秘めて蠢いているのを。

11. Frühlingstraum

11. 春の夢

主人公は屋根のある場所を見つけ、不安に苛まれつつも眠りにつく。しかし浅い眠りで、まだ暗い内に目が覚めてしまう。見た夢は幸せいっぱい、あまりにもかけ離れた現実との違いに愕然とする。窓についた雪の結晶を木の葉に見立て、それが色づくことを望むが、それが夢の中でしかあり得ないことを彼は知っていて、出来れば夢の世界から二度と戻らないこと（すなわち死）を望んでいるようだ。

<冬の旅>全24曲の中で、途中で拍子の変化を伴うものはこの曲だけである。この曲が単に夢を見た、ということを伝えるにとどまらず、長い旅の中、この時に主人公が一番あの世に近づいた、それどころか足を踏み入れかけた、ということ表現しているのではないかと思えてならない。

Ich träumte von bunten Blumen,
So wie sie wohl blühen im Mai,
Ich träumte von grünen Wiesen,
Von lustigem Vogelgeschrei.

色とりどりの花の夢を見た、
それはちょうど五月に咲くようなやつだ。
緑の草原の夢を見た、
楽しげな鳥のさえずり。

Und als die Hähne krächten,
Da ward mein Auge wach,
Da war es kalt und finster,
Es schriegen die Raben vom Dach.

すると雄鶏が鳴いて、
俺は目を覚ました。
そこは寒くって真っ暗で、
屋根で大鴉^{おおがらす}がわめいていた。

Doch an den Fensterscheiben,
Wer malte die Blätter da?
Ihr lacht wohl über den Träumer,
Der Blumen im Winter sah?

いったいあの窓ガラスに
誰が葉っぱなんか描いたんだ？
さてはおまえら、この夢想家をあざ笑ってんだな、
この冬に花を見たってか？って。

Ich träumte von Lieb' um Liebe,
Von einer schönen Maid,
Von Herzen und von Küssen,
Von Wonne und Seligkeit.

愛ばかりの夢を見た、
美しい乙女、
抱擁と口づけ、
歓喜と至福。

Und als die Hähne krächten,
Da ward mein Herze wach,
Nun sitz' ich hier alleine
Und denke dem Traume nach.

すると雄鶏が鳴いて、
俺の心が目覚めた。
いま俺はここに独りぼっちですわり、
夢について思いにふける。

Die Augen schließ' ich wieder,
Noch schlägt das Herz so warm.
Wann grünt ihr Blätter am Fenster,
Wann halt' ich mein Liebchen im Arm?

俺はまた目をつぶったが、
今なお胸が熱っぽくドキドキしている。
いつ窓の葉っぱが緑に染まり、
いつ恋人を俺の腕に抱けるのか？

12. Einsamkeit

12. 孤独

前述の通り、シューベルトは当初〈冬の旅〉をこの第12曲 *Einsamkeit* までで完結する作品として作曲していて、当初は二短調の作品として作曲していた。そう、第10曲で説明したのと同じく、第1曲と同じ調性である。その調であれば、ひとつ前の *Frühlingstraum* (イ長調) からは属調→主調という関係になり、さらに最初の調に戻るということから、物事が解決に向かう印象を与える。しかしおそらくは第1部の出版の準備の段階で残りの詩の存在を知り、すぐに第2部の作曲に取り掛かり、作曲を終えて数ヶ月後に第1部が出版されるのだが、そこではこの第12曲がロ短調に変更されていた。冒頭の調に戻るという解決策を放棄し、さらに長く苦しい旅が続くことを暗示させている。

Wie eine trübe Wolke
Durch heitre Lüfte geht,
Wenn in der Tanne Wipfel
Ein mattes Lüftchen weht:

どんよりとした雲が
晴れ渡った空を抜けていくかのように、
樅の梢の中を
くたびれた風が吹いていく時、

So zieh' ich meine Straße
Dahin mit tragem Fuß,
Durch helles, frohes Leben,
Einsam und ohne Gruß.

おんなじように俺も自分の道を、
鈍った足でゆっくり進む。
明るく楽しげな賑わいの中を
ひとりぼっちで、挨拶もされず。

Ach! daß die Luft so ruhig,
Ach! daß die Welt so licht!
Als noch die Stürme tobten,
War ich so elend nicht.

ああ！ こんなにも空は穏やかで、
ああ！ こんなにも世界は明るい！
まだ嵐が荒れ狂っていた時、
俺はこんなにも惨めじゃなかった。

ZWEITE ABTEILUNG

第二部

13. Die Post

13. 郵便

郵便屋が吹き鳴らすポストホルンの響きから第2部が始まる。今でも欧州の多くの郵便局ではこのポストホルンの形をシンボルマークにしているが、当時は配達人が吹き鳴らすこの金管楽器の音色が、郵便の到着を告げる合図だったのである。主人公は不意にその音を聞いて、思わず色めき立つ。自ら居場所を放棄した彼に届く郵便物などあるわけもないのだが、それでも一瞬期待してしまう瞬間、あるいは自分の置かれた立場を推敲する瞬間が、時間が止まったかのような1小節間のジェネラルパウゼ（無音部分）で表現されている。

Von der Straße her ein Posthorn klingt,
Was hat es, daß es so hoch aufspringt,
Mein Herz?

Die Post bringt keinen Brief für dich,
Was drängst du denn so wunderlich,
Mein Herz?

Nun ja, die Post kommt aus der Stadt,
Wo ich ein liebes Liebchen hatt',
Mein Herz!

Willst wohl einmal hinüber sehn
Und fragen, wie es dort mag gehn,
Mein Herz?

14. Der greise Kopf

主人公は早く死にたくてしょうがない。髪が白くなったように見えたのを年老いたと錯覚して喜ぶ様子は、滑稽を通り越してあまりにも哀れである。最後の行は繰り返され、特に2度目は殊更に若々しく、力強い表現になっているのが皮肉。

Der Reif hatt' einen weißen Schein
Mir übers Haar gestreuet.
Da glaubt' ich schon ein Greis zu sein,
Und hab' mich sehr gefreuet.

Doch bald ist er hinweggetaut,
Hab' wieder schwarze Haare,
Daß mir's vor meiner Jugend graut—
Wie weit noch bis zur Bahre!

Vom Abendrot zum Morgenlicht
Ward mancher Kopf zum Greise.
Wer glaubt's? Und meiner ward es nicht
Auf dieser ganzen Reise!

15. Die Krähe

一般的には今も昔もカラスは嫌われ者である。ゴミを漁り、弱い動物から餌を横取りし、野垂れ死にした動物の死体に群がる。主人公はこのカラスに人間の、あるいはもっと進んで自分自身の姿を投影しているのだろうか。

Eine Krähe war mit mir
Aus der Stadt gezogen,
Ist bis heute für und für
Um mein Haupt geflogen.

Krähe, wunderliches Tier,
Willst mich nicht verlassen?

通りの方から郵便ラッパの音が響いてくる。
なんだよ、そんなに飛び上がるようなことか、
俺の心よ？

郵便屋はおまえに手紙なんざ持って来ない、
いったいなんでそんな妙にせつつくんだよ、
俺の心よ？

そうさな、あの郵便屋は町から来たんだ、
俺が可愛い恋人と一緒にあったとこだ、
俺の心よ！

おまえきつといつかはあっちを向いて
訊きたいのか、町の様子を、
俺の心よ？

14. 白髪頭

霜が見た目を白くしようと
俺の髪に降りてきた。
そこで俺はもう年寄りになれたと思い込んで、
大いに喜んだんだ。

だがそいつはすぐに融け去って、
また黒髪に戻っちゃった。
この若さにぞっとする、
棺桶までまだなんて遠いことか！

夕焼けから朝日までの間に
白髪頭になっちゃったのが幾人もいるんだと。
信じられるか？ 俺のはそうになってない、
こんな長旅だつてのに！

15. カラス

カラスが一羽、俺と一緒に
町からやって来た。
今まで絶えず
俺の頭の周りを飛んでいたんだ。

おいカラス、妙な奴だ、
俺から離れようとしんないのかよ？

Meinst wohl bald als Beute hier
Meinen Leib zu fassen?

どうやらそのうちここで、獲物として
俺の体をとっ捕まえようと思っているんだな？

Nun es wird nicht weit mehr gehn
An dem Wanderstabe,
Krähe, laß mich endlich sehn
Treue bis zum Grabe.

まあ、ここからさほど長くはないだろう、
この旅杖に頼るのも。
カラスよ、いいかげん見せてみろよ、
墓までついて来る忠実さを。

16. Letzte Hoffnung

16. 最後の望み

調性も拍子もはっきりしない、不安定な音型の連続でひらひら舞い落ちるいくつもの葉の様子が描写される。主人公はその中のいかにも簡単に吹き飛ばされそうな葉1枚に希望を賭けているように見える。思ったよりは持ちこたえつつ風に揺れる葉にはらはらしながら見守るが、結局はあっけなく落ちて終わる。第3連の文を仮定法と捉えれば、葉が実際に落ちたのかどうかも曖昧になっては来るが、いずれにせよ主人公は残酷な現実打ちのめされ（おそらく）激しく泣く。そしてこれ以降、主人公が泣く描写は一度も出てこない。涙が枯れるとはこういう状態であろうか。

Hie und da ist an den Bäumen
Manches bunte Blatt* zu sehn,
Und ich bleibe vor den Bäumen
Oftmals in Gedanken stehn.

あちこちで木々に
色とりどりの葉っぱがいくつも見える。
俺は木々の前に立ち止まり
たびたび物思いに耽る。

Schaue nach dem einen Blatte,
Hänge meine Hoffnung dran,
Spielt der Wind mit meinem Blatte,
Zittr' ich, was ich zittern kann.

葉っぱのひとひらに目を留め、
俺の望みを託してみる。
風がその葉っぱと戯れ、
俺はこの上なく震え上がる。

Ach, und fällt das Blatt zu Boden,
Fällt mit ihm die Hoffnung ab,
Fall' ich selber mit zu Boden,
Wein' auf meiner Hoffnung Grab.

ああ、そして葉っぱが地面に落ちる、
それとともに俺の望みもついで。
俺も地面にくずおれ、
葬られた望みの上で涙する。

* ミュラーの詩では Noch ein bunte Blatt
(まだ色づいた葉っぱがひとつ)

17. Im Dorfe

17. 村で

共同体に属することを拒んだ主人公。眠りこける村人や敵対的な犬を皮肉っぽく批判するが、人々の中に自分の居場所がないことを再確認するにとどまり、もはや感情を大きく高ぶらせることもない。

Es bellen die Hunde, es rasseln die Ketten,
Es schlafen* die Menschen in ihren Betten,
Träumen sich manches, was sie nicht haben,
Tun sich im Guten und Argen erlaben,

犬どもが吠え、鎖がじゃらつく。
人々はそれぞれ寝床で眠りこけ、
自分らにないものの夢をあれこれ見て、
それが良かれ悪しかれ、何にせよ元気づく。

Und morgen früh ist alles zerflossen.
Je nun, sie haben ihr Teil genossen,
Und hoffen, was sie noch übrig lieben,
Doch wieder zu finden auf ihren Kissens.

明日の朝にはすべてが消え去るのだが。
まあいいか、あいつらは分け前を受けて
あまつさえまだ手に入れていないものも望み、
枕の上で再三見つけようとする。

Bellt mich nur fort, ihr wachen Hunde,
Laßt mich nicht ruhn in der Schummerstunde!
Ich bin zu Ende mit allen Träumen,
Was will ich unter den Schläfern säumen?

俺にただ吠えかけ続けろ、番犬ども、
このまどろみの時にも俺を休ませるな。
俺の夢はもう全部終わってんだ、
眠りこけた連中んとこでぐずぐずしてる場合か？

* ミュラーの詩では schnarchen (いびきをかく)

18. Der stürmische Morgen

第17曲で主人公の体制への批判的立場が明確になったが、ここではそれを同主調で受けている。嵐と曙光に自分の思いを投影する様子を激しい調子で描写するが、第1連及び第3連前半の比較的口調の弱い箇所がピアノと全くユニゾンであり、不安感、狂気、死の影といったものを示す時のバロック以来の伝統的なユニゾンの用法といえる。またそれと同時に、この曲がハンガリー風舞曲のスタイルで書かれていることも興味深い。

Wie hat der Sturm zerrissen
Des Himmels graues Kleid,
Die Wolkenfetzen flattern
Umher in mattem Streit.

嵐が引き裂いてしまったようだ、
空の灰色の衣を。
雲の切れっばしがあちこちにヘラヘラ舞い、
やる気なく喧嘩している。

Und rote Feuerflammen
Ziehn zwischen ihnen hin,
Das nenn' ich einen Morgen
So recht nach meinen Sinn.

そして紅蓮の^{ほのお}火焰が
雲間を突っ切る。
これぞ朝と呼ぶべきだな、
俺の感覚にピッタリだ。

Mein Herz sieht an dem Himmel
Gemalt sein eignes Bild,
Es ist nichts als der Winter,
Der Winter kalt und wild.

俺の心は空を臨み、
そこに描かれた自分の姿を見る。
それは冬以外の何物でもない、
寒く、荒涼とした冬だ。

19. Täuschung

第18曲と同じく舞曲のスタイルだが、今度はもう少しわかりやすいウィナーワルツのスタイルである。実のあるものを得られない主人公の様子を「会議は踊る、されど進まず」と評されたウィーン会議になぞらえてでもいるのだろうか。主人公は第9曲の時と同様に、正体不明の光に自分からたぶらかされに行くという道を選ぶ。

Ein Licht tanzt freundlich vor mir her;
Ich folg' ihm nach die Kreuz und Quer.
Ich folg' ihm gern und seh's ihm an,
Daß es verlockt den Wandersmann.
Ach, wer wie ich so elend ist,
Gibt gern sich hin der bunten List,
Die hinter Eis und Nacht und Graus
Ihm weist ein helles, warmes Haus
Und eine liebe Seele drin—
Nur Täuschung ist für mich Gewinn.

光が愛想良く踊り行き、
俺はそいつを縦横に追い回す。
自ら進んでついて行って、そして見て取る、
こいつがさすらい人を誘惑してんだな、と。
ああ、俺みたくみじめな奴ってのは
色鮮やかな謀略に喜んで引っかかりに行く、
そいつが氷と夜と戦慄の裏に
明るい、あったかい家を見せてくれる、
その中に愛らしい人が——
たぶらかしだけが俺の取り分。

20. Der Wegweiser

主人公の足取りは人々を避け、どこまでも孤立していく道を進む。また第1曲と同じ2/4拍子で Mäßig（節度を持って）の速度表示が登場し、休むことなく歩き続ける。「未だ誰ひとり戻って来ていない道」を求めて。

Was vermeid' ich denn die Wege,
Wo die andern Wanderer geh'n,
Suche mir versteckte Stege
Durch verschneite Felsenhöh'n?

Habe ja doch nichts begangen,
Daß ich Menschen sollte scheu'n,
Welch ein törichtes Verlangen
Treibt mich in die Wüstenei'n?

Weiser stehen auf den Wegen,*
Weisen auf die Städte zu,
Und ich wandre sonder Maßen,
Ohne Ruh', und suche Ruh'.

Einen Weiser seh' ich stehen
Unverrückt vor meinem Blick,
Eine Straße muß ich gehen,
Die noch keiner ging zurück.

* ミュラーの詩では Straßen（[比較的広い]道路）

21. Das Wirtshaus

行き着いた先は墓場であった。墓に飾られたリース（クランツ、木の枝を編んで作ったお飾り）から連想したか、この墓場を居心地のいい宿場（伝統的な宿屋の玄関にはクランツが飾られている）と見立て、安らかな（そして願わくば永遠の）休息にありつきたいと願う主人公。しかしふと気付く。墓地に埋葬されるのは教会の一員のみ。自分のような放浪者の入る余地はない。主人公の決心は早かった。すぐるべき宗教にすら別れを告げ、旅を続けるのみ。

全24曲中唯一のヘ長調であり、速度表示も唯一の Sehr Langsam（極めてゆっくりと）と指示されたこの曲は、荘重な和音ばかりでゆったりと進行し、教会に鳴り響くオルガンやボザウネンコーア（金管アンサンブル）の音色を髣髴とさせ、主人公が別れを告げた後も、その響きは曲の終わりまでいささかも揺らぐことがない。

Auf einen Totenacker
Hat mich mein Weg gebracht,
Allhier will ich einkehren,
Hab' ich bei mir gedacht.

Ihr grünen Totenkränze
Könnt wohl die Zeichen sein,
Die müde Wanderer laden
Ins kühler Wirtshaus ein.

Sind denn in diesem Hause
Die Kammern all' besetzt?

20. 道しるべ

なぜ俺は避けているんだ、
他の旅人が行くような小路を。
どうして人目につかない、
雪に埋もれた岩山の細道とか探してんだ？

別になんにもやらかしちゃいない、
人様を怖れなきやいけなような真似は。
なんて阿呆らしい願望なんだよ、
俺を荒野に追いやるなんて？

道しるべが小路に立っていて、
町の方向を指し示している。
しかし俺は際限なくさすらう、
休息なしに、だが休息を求めて。

道しるべが一本見える、
揺るぎなく俺の視線の先に立っている。
道を行かねばならない、
未だ誰ひとり戻って来ていない道を。

21. 宿屋

ある墓場へと俺を
この小路が連れて行った。
ここで休息したいと
ひそかに思った。

おまえたち緑のリースは
きつとるしなんだろう、
くたびれた旅人を
ひんやりとした宿屋に招くための。

なんだって、ここの
部屋はすべて塞がってるって？

Bin matt zum Niedersinken,
Bin tödlich schwer verletzt.

くずおれそうなほど疲れ果て、
死にそうなほど傷ついてるってのに。

O unbarmherz'ge Schenke,
Doch weisest du mich ab?
Nun weiter denn, nur weiter,
Mein treuer Wanderstab.

おお、血も涙もない宿屋め、
そうか、俺を追っ払うってんだな？
なら引き続き行くさ、ただ先へ、
忠実な旅杖よ。

22. Mut

22. から元気

一般的にこの曲の原調はト短調、第24曲 Der Leiermann はイ短調とされている。シューベルトの自筆譜ではそれぞれイ短調、ロ短調で書かれているが、第2部の初版本ではこの2曲だけ全音低く移調されていたのだ。近年の研究によると、この移調にはシューベルトの同意があったという証拠がなく、編集者トビアス・ハスリンガーの独断である可能性が高いという。そこで今回は、シューベルトが書いた通りの調性に沿って演奏したいと思っている。

さて、Mut の訳として一番一般的なのは「勇氣」である。しかしこの主人公の態度は果たして「勇氣」と呼べるものであろうか。いきなり漫画の話で恐縮だが、荒木飛呂彦の有名な漫画<ジョジョの奇妙な冒険>に以下のような台詞がある。

「ノミっているよなあ……ちっぽけな虫けらのノミじゃよ！ あの虫は我々巨大で頭のいい人間にところかまわず攻撃を仕掛けて戦いを挑んでくるなあ！ 巨大な敵に立ち向かうノミ……これは『勇氣』と呼べるだろうかねエ」

もちろん「勇氣」とは呼べない。この曲の主人公のことを考える時、私はなぜか上記の台詞を思い出す。そういうわけでいつも基本的に直訳に近い訳を選ぶ私ではあるが、ここでは Mut の訳として「から元気」を選ばせていただいた。

曲はやる気を鼓舞するように威勢が良い。前奏もフォルテで勢いがあるのだが、どうしたわけか歌が入ってくるとピアノになり、大きくてもメッツォフォルテ止まり。歌がやめた途端にまたフォルテになるという、ほとんどいじめのような仕打ちである。主人公が必死に元気を振り起こしても、それをサポートする力強い存在はいない。なんという寂しさ！

Fliegt der Schnee mir ins Gesicht,
Schüttl' ich ihn herunter.
Wenn mein Herz im Busen spricht,
Sing' ich hell und munter.

顔に雪が飛んできたら
振り落としてやらあ。
心が胸中でゴチャゴチャ抜かすなら、
明るく元気に歌ってやらあ。

Höre nicht, was es mir sagt,
Habe keine Ohren.
Fühle nicht, was es mir klagt,
Klagen ist für Toren.

聞かねえよ、心がなんか言ってきても、
聞く耳持たん。
感じねえよ、心が嘆いてこようと、
嘆きなぞ、馬鹿者どものためのもんだ。

Lustig in die Welt hinein
Gegen Wind und Wetter;
Will kein Gott auf Erden sein,
Sind wir selber Götter!

陽気に世間に入って行こう、
風や雷雨にもめげずに。
地上に神がいなくてんなら、
俺たち自身が神々ってことだろ！

23. Die Nebensonnen

23. 幻日

幻日は自然現象のひとつで、空気中に浮かぶ氷晶がレンズとなり光を屈折させ、空に複数の太陽があるように見える現象のことである。主人公もそのような光景を目にし、そこに自分の思いを投影するが、彼のいう3つの太陽とは果たして何を指しているのだろうか。キリスト教の3つの徳である「信仰、希望、愛」であるという説も根強い支持を得ているが、私は3つのうち2つがかつての恋人の両方の瞳、残るひとつは自分自身という説を採用。もはや恋人の瞳を二度と見ることもなく、自分自身にも別れを告げる主人公。もはや行き着く先は誰にもわからない。

Drei Sonnen sah ich am Himmel stehn,
Hab lang' und fest sie angesehen.
Und sie auch standen da so stier,

空に太陽が三つあるのが見えて、
長い時間、じいっと見つめていた。
太陽たちも無表情で身じろぎもしなかった、

Als wollten sie nicht weg von mir.
Ach, meine Sonnen seid ihr nicht,
Schaut andern doch ins Angesicht!
Ach,* neulich hatt' ich auch wohl drei:
Nun sind hinab die besten zwei.
Ging' nur die dritt' erst hinterdrein,
Im Dunkeln wird mir wohler sein.

* ミュラーの詩では Ja (そうだ)

24. Der Leiermann

ライアーという楽器は英語圏ではハーディ・ガーディとして知られる。多くはギターのような胴体を持つ擦弦楽器で、ハンドルを回すと内部に仕掛けられた木製の円盤が回転し、その円盤の縁で張られた弦を擦って音が出る。鍵盤状のキーがついていて、それを押すと旋律を出すための弦が押さえられて音高を変えることが出来る。旋律を担当するための弦の他に通常1対の弦が別に張られていて、これらは鳴りっぱなしのドローン弦となり、多くは完全5度に調弦されている。

この曲の前奏はそのドローン弦の描写から始まる。半音下からずり上げるような前打音を伴っているあたり、この楽器を回し始めた時に音がひずむ様子をよく表している。この楽器を弾く辻音楽師、お世辞にも腕が良いとはいえ、周囲で何が起こってもそれに影響されることもなく、抑揚もなく何種類かの単純な旋律を繰り返すのみ。

ふと主人公が声をかける。それまで一度も他人に関わりたくせず、人目を避けていた彼にそうさせた動機は何であろうか。声をかけた刹那、突然ライアーの音が大きくなる。主人公の声に答えたのであろうか？ また何事もなかったかのように小さな音に戻るライアー。大きな謎を残したまま、静かに曲は終わる。

Drüben hinterm Dorfe
Steht ein Leiermann,
Und mit starren Fingern
Dreht er, was er kann,

Barfuß auf dem Eise
Wankt er hin und her,
Und sein kleiner Teller
Bleibt ihm immer leer.

Keiner mag ihn hören,
Keiner sieht ihn an,
Und die Hunde knurren
Um den alten Mann,

Und er läßt es gehen
Alles, wie es will,
Dreht, und seine Leier
Steht ihm nimmer still.

Wunderlicher Alter,
Soll ich mit dir gehn?
Willst zu meinen Liedern
Deine Leier drehn?

まるで俺から離れたくないかのように。
ああ、おまえたちは俺の太陽じゃない、
他の奴の顔でも見ててくれ！
ああ、最近まで俺も確かに三つ持っていたんだ、
今や、いいほうの二つが沈んじまった。
三つめのも続いて行ってくればいいのか、
俺には暗闇の中のほうがより快適なんだ。

24. ライアー弾き

村はずれの向こうに
ライアー弾きが立っている。
かじかんだ指で
回している、出来うる限り。

裸足で氷の上に
あっちやこっちによろめいている。
彼のちっこい皿は
ずっと空っぽのまま。

誰ひとり聴こうとしない、
誰ひとり見向きもしない。
犬どもがうなっている、
あの年寄りの周りで。

あるがままにほっておき、
すべてを成り行きに任せ
回す、彼のライアーは
鳴り止むことがない。

おい変なじじい、
あんたと一緒に行くべきか？
俺の歌に合わせて
ライアーを回してくれるのか？

淡野太郎 私訳